

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

《理工農系》

●東京工業大学情報理工学研究科情報環境学専攻

「PBLと論文研究を協調させた教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院教育を、知識・技能の向上と同時に、研究遂行能力の経験に基づく体得ととらえ、特に研究をグループで遂行するための方法について必修科目「情報環境プロジェクト」によるグループワークとして経験させ、そこで担当しなかった役割についても必修科目「情報環境プラクティス」で経験させるカリキュラム体系を構築し、その手法を学位論文研究にも適用させ、その進展を専攻内の他専門の教員との間で「オフラボディスカッション」させ、視野や価値観の多様性を経験させるとともに、学生の教育指導体制を専攻の全教員が関わる体制に整備した。さらに、各学生には定期的に「研究プロセスメモ」を取りまとめさせ、提出させることにより、研究の進展を客観的に把握できる仕掛けを課している。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

必修科目の中では、問題の発見・課題設定・問題解決のプロセスがグループワークの中で実現するよう工夫している。中では、創造性育成への配慮も行っている。

研究のプロセスメモやディスカッションにおいては、研究遂行における論理性を重視し、テーマの成功/不成功にとらわれない評価手法を導入している。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

研究成果のプレゼンテーションにおいて、課題のとらえ方が論理的であり、多面的価値感の中で展開できるようになった。

就職先においてスムーズに業務課題を理解して取り組めると、特にグローバル企業における評価をいただいている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

《理工農系》

●東京工業大学情報理工学研究科情報環境学専攻

「PBLと論文研究を協調させた教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

専攻の必修科目「情報環境プロジェクト」および「情報環境プラクティス」は、専攻内教員のすべてがその指導に関わり、それぞれ班編成したグループを分担指導している。

「オフラボディスカッション」では、学生個人から見ると毎回異なった分野の教員とディスカッションすることになり、専攻教員群の多面的価値観や多様な指導方法にふれ、最終的には専攻教員全員の合議に基づく修了判定を経て学位を与えている。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

非常に多くの教員への負荷がかかるため、この教育システムを経験した高学年の学生に積極的にTAとして関わらせることにより、現状のスタッフで何とか実現を図っている。

一方、TA経験者にとっては、指導者側の視点に立ったプロジェクト推進の経験が新たな発見となって副次的に教育的効果も生んでいる。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

学位論文の中間および最終発表会において、すべての学生をすべての教員が良く知っている状況となり、極めて家族的である中で、本質的議論が行われる良好な環境を形成出来ている。

ポスター形式の中間発表においては、学生間のディスカッションが極めて盛んとなり、プレゼンテーション能力とディベート能力向上が図られ、学生間の仲間意識も高められている。